

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第10回 名古屋空襲を生き延びて(前編)

木野 登喜子さん 昭和11年生まれ

戦争当時、私が両親と暮らしていた愛知県の名古屋は軍需工場や飛行場が多くあり、米軍による攻撃の標的になっていました。しかし、これらは自宅から離れた場所にあつたため、私は空襲を経験したことがありませんでした。

国民学校の2年生だった昭和20年3月11日。3月にしては暖かい一日で、私は仲良しのきぬちゃんと人形遊びをして楽しく過ごしていました。その傍ら、大人たちは9日に東京で空襲があったといううわさで持ち切りでした。

無我夢中で逃げ回った空襲の夜

その日の夜遅くのことで。空襲警報のサイレンが鳴り出したので、私たちは自宅の防空壕に避難しました。防空壕といっても、庭に穴を掘って階段を付け、木の板でふたをただけ。その中に両親と私の3人がしゃがむと、ぎゅうぎゅうになってしまいました。サイレンは、はじめは警戒警報といって「ウー、ウー、ウー」と途切れ途切りに鳴り、その後さらに敵機が近づいた時は「ウー」と鳴りっ放しになります。いつもは警戒警報が鳴るだけで、それ以上敵機が近づいて来ることはないため「今夜も上空を通過するだけだろう」と考えていると、すぐにサイレンが鳴りっ放しになりました。しばらくして、防空壕のふたを開けて外をのぞいた父が「逃げろ」と叫びました。周りの家が燃えていたのです。

私は玄関に用意しておいた非常用の持ち出し袋を背負っ



名古屋上空で爆弾を落とすB29(愛知・名古屋戦争に関する資料館提供)

て、母の手を握り走り出しました。道の両側の家がものすごい勢いで燃えていて、大量の火の粉が舞っていました。このままだと着ている服に火が燃え移ってしまうため、家の前にある大きな桶にためていた防火用の水をかぶりながら走り出しました。冷たいとか寒いとかを感じる間もなく、さまざまの炎の熱ですぐに乾いてしまいます。私たちは、走っては水をかぶり、水をかぶっては走り、逃げ続けました。

夜中だというのに、炎と米軍機が落とした照明弾のせいで周囲は昼間のように明るかったです。しかし、空は大量の煙に覆われ、爆撃機B29の姿は見えませんでした。その中を焼夷弾が落ちてくるのですから、たまりません。小学校の校庭に避難するはずが、炎と煙に行く手を阻まれて、どこに行ったらいいかわかりません。誰かが「こっちに逃げろ」と叫ぶと、みんながその方向に走り、また誰かが「こっちはだめだ、あっちに逃げろ」と言うと、その方向に走るというように右往左往して、とにかく火のない場所を探して逃げ回りました。

ようやく小学校の校庭にたどり着いた時には夜が明けていました。いつもなら子どもの足でも20分程度で着くところを5時間以上も走り回っていたことになります。高級料亭が立ち並んでいた私の街は灰とがれきに変わり、一緒に遊んだ親友のきぬちゃんにも、二度と会うことはできませんでした。

(後編は6月15日号で掲載予定)

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年5月15日号 No.1531



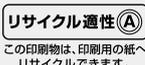
成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です

*本紙は5月2日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

先日、「最近、脂が乗ってきたね」と言われました。仕事振りを褒められた気がして誇らしい気持ちでしたが、思い返せば明らかに腹回りを見ていたような…。ふと鏡を見てみると、顔はふっくら、おなかはおぽっこり。なるほど、これは「人生の脂」ではなく「脂肪」が乗ってきたという意味だったようです。スーツがきつくなってきたのも経験の証しと笑っていたいところですが、そうも言ってもらえません。本気で運動しようと思います。



リサイクル適性
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。